

●本号は、『国際女性学会』（代表幹事・岩男寿美子慶応義塾大学教授）の「女性と職業に関する研究分科会」による研究プロジェクトからの成果（初年度分）を収録した。女性の職業進出が声高にとりざたされ「キャリア・ウーマン」の活躍がマスコミなどで話題となる昨今だが、「女が働くこと」には、「男」の職業生活のありようや組織内キャリア発達のプロセスとくらべて、どこにどのような異同が存在しているのだろうか。

●当該研究プロジェクトは、都内中小企業42社の「女社長」たちを対象とした面接調査にもとづく「女性と職業のかかわり」に関す

る事例研究である。42名の女性たちが「経営者」へと就任していった契機・環境や時代背景とのからみ、彼女たちの経営行動や経営観が、刻明な面接聞きとりをとおしてほり深くさぐられている。

●インタビュー・プロトコールから素描された彼女たちの経営活動や職業生活には興味深い点が多々ある。たとえば、「大卒のお嬢さん社員」たちをあまり高く評価していないこと、反面、主婦パートタイマーを「頼り」にしている面があること、経営にあたって「理論・専門知識」を重視していること、できれば「男」を後継者にと強く望んでいること、など。これらがより深くは何を意味するのかの解明は当該プロジェクト2年度以降での探索課題である。

本モノグラフはまた、「職場としての中小企業と女性のかかわり」をも資料の許す範囲で考察を試みている。関係者には参考になる点も多いであろう。ご一読のうえ、感想なりご意見なりを私たちまでお寄せいただければありがたいと思う。

●ところで、私たち「社会心理学班」にとって、昨年とはひとつの「節目」の年であったような気がする。

昨年の5月、佐野（勝男）が常任理事に選任された。役目は「労務」担当である。慶応義塾の財政的な見通しを考えると、それは

「汚れ役」と言ってもマァ許されるのではあるまいか。氏は「慶応への最後のご奉公……」といったニュアンスのことをつぶやかれていたが、お身体をくれぐれも大切にという気持である。

●また、昨年4月に文学部の社会・心理・教育学科に「人間科学」専攻が増設された。そして榎田（仁）が、この専攻のいわば主任教授の役割を負うこととなった。いま風の名前が受けたのか「人間の総合的理解」が渴望されている時代なのか、200人も学生が押し寄せてきたのである。「行きがかり上しようがない。やる以上は……」と氏の決断には一種悲壮なものも感じられたが、「ゆっくり（と着実に）築こう新専攻」というのが同専攻の一員となった私の気持ではある。

●また、昨年の9月まで二期にわたって大学院経営管理研究科委員長の大任にあつた関本（昌秀）は、この夏から、半年の研究休暇をとることになっている。「リチャージ」にむけて欧米へと旅立つ予定だ、という。そして最後に、私自身の状況をいえば、この5月末に父親にあいなるという具合だ。「男がいい？ それとも女？」などときかんに聞かれるのだが、私自身どんな「親」へと変身していくのかの予測を含めて「何とも言えない」気持ではある。

（南 隆男）

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究（第9号）

責任編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON  
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND  
HUMAN PERFORMANCE No. 9  
MARCH 1982

〒108 東京都港区三田2-15-45  
発行 慶應義塾大学産業研究所  
電話 (453) -- 5640 (直通)

<昭和57年3月31日>

〒104 東京都中央区八丁堀3-21-4  
印刷 株式会社 国際印刷  
電話 (551) -- 3930 (代表)

<昭和57年3月23日>